# 我が大学の世界語教育：古典講読の鍵としての世界語

## １）従来の位置付け

大学でエスペラントをいかなる位置付けにより教えるか？（すなわち、Discipline の問題である。） これは大学が専門科学を教える場である以上、きわめて本質的な問題である。教養科目の言語として教えることができれば事はそれほど困難ではないと思われるだろうが、エスペラント語は独、仏、中、露、西、伊などと異なり一定の国の国語ではない。つまり、「外国語」として位置付けられない。外国語課目に今の定義では入らないのである。

では、これまで世界ではどのようにエスペラント語が大学で教えられたか？ 例えば、スターリンによる邪悪な弾圧の後、ソ連では有名な言語学者ボカレフによってエスペラントは「Interlingvistiko」（国際語学、言語間言語学？sic!ある辞書の訳である）などという表題で教授された。その傾向は今や全世界で支配的となり、あちこちの大学でこの「インテルリングヴィスチコ」の名称の「言語学」の専門分野として、教えられている。これは言語学者でエスペランチストという教員ならば、学科目がたてやすいだろうが、そうでないエスペランチストには容易ではない。ただし、この分野ではアムステル大学をはじめ多くのヨーロッパの大学でかなり豊かな学問的蓄積がなされてきた。わが国の言語学者の間にエスペラントを広めて、欧米なみの水準まで追いつかせる必要があるだろう。

私は東京大学、東京工業大学、でもエスペラント語を教える経験をしているが、そこでは「特別開講課目」として「エスペラントの世界」なる名称がつけられている。これは常設課目ではなく、当該大学の学部の意向によってとりやめになることもある。両方とも私の知己が好意で開講してくれた。しかし、開かれないよりは開かれた方がいいに決まっている。

我が埼玉大学では、2005 年から毎年エスペラントを開講しつづけてきた。これは、ゲルマン文学者でかつ素読教育で高名な安達忠夫教授と一緒にはじめた。私は「ロシア・東欧圏の文化」、安達さんは「ゲルマン語圏の文化」などなどの名称で実はエスペラント語を教えてきた。既存の講義題目、つまり専門科目名を勝手に変更することはできないのである。一学期は 15 回程度の授業、つまり 3 ヶ月で終わる。2 ヶ月をエスペラント語、あとの残りでアンデルセンやグリムの童話を各国語対照で読む、という方法をとった。ザメンホフはロシア帝国の国民であったから、僕の本来の義務である講義題目から外れるわけではない。また、グリム童話は立派なドイツ語文化である。このようなこじつけで 2007 年までやってきた。その方法で教わった学生達は語学コンプレックスから比較的自由になり、ヨーロッパ文化の勉強を続けてくれた。仏、独、中、露の外国語が埼玉大学当局の方針で圧殺された状況にもかかわらず、ヨーロッパ文化コースに進学する学生が逆に増えたのは、ある程度エスペラントの好影響も否定できない。（ちなみに、アジアコースの学生は激減した。これは中国語の位置付けの低下も一因である。）この方法は他学部学生も聴講する大人数講義

では今も継続し、2008 年度前期には 55 名の学生がエスペラントを学習した。その感想は私のホームページに掲載している。(2009 年前期は教養学部内部の講義「ヨーロッパ文化基礎演習」と題して従来のエスペラント教育を実施、22 名の聴講者がいる。)　しかし、この二年間で我々の世界語教育の方法は従来の方法から大飛躍をした。

## ２）教育方法の発展

従来、ロシア文学、歴史、文化、ゲルマン文化などの看板の裏で、エスペラント語の基礎を教え、その上でアンデルセン童話やグリム童話などを読みながら、各国の対訳を配布して学生達に外国語（英、独、仏、露、中その他）の基礎を提供してきた。これはエスペラント教育を主眼としたものであった。そしてその成果は大なるものであった。しかしながら、その方法では外国語の基礎、という点に拘泥し過ぎる感があった。埼玉大学の全学部向けに開講される多人数講義の場合はその方法は適していた。しかし、比較的少人数の教養学部限定専門講義には別の方法をとる必要が生じてきた。

2007 年の後半から、僕はロシア文学講義、「エヴゲーニイ・オネーギン」と題して従来の日本語による文学講義を行うと同時に、18 人程度の受講者達に日本語、英語、そしてエスペラント語のテキストを配布した。エスペラント語テキストはヴァレンチン・メーリニコフ訳の版である。受講生のうちそれを読むことができるものが大部分であったので、配布だけしておき、読んでも読まなくてもいい、読める部分だけ読んでもいい、という程度にしておいた。ただ、日本語訳で気に入った表現があった部分はエスペラント語でどう書いているかだけ記しておくように、と指示しておいた。この成果は教える僕の方に大きな収穫があった。講義の度に各章をエスペラント語で熟読して講義準備をした。ここでエスペラント語訳の優秀さに瞠目した。

2008 年から、「スラブ文化演習」という講義題目のもとでチェコ文学をとりあげて、その全体的背景を教えると同時に、『兵士シュヴェイクの冒険』を栗栖継訳とエスペラント訳と比較しながら、学生に読ませていった。14 人程度の受講者であったがエスペラント語既習者と未習者が半分半分であった。しかし、開始から一ヵ月後には全員エスペラント語で読めるようになっていた。授業の最初に僕が作成した世界語教科書を配布しておき、既習者が未習者に時間をみつけて教えておくこととした。既習者は教える喜びを感じたのか、短期間で教科書を読了し、『兵士シュヴェイク』を読み進めることが可能となった。授業で取り扱うことのできるページ数はごく限られている。しかし、これが誘い水となって、学生達自身が他の残りの部分を自分で読んでくれればいい、と思う。講義でいくら知識をつめこんでも時間が少ないのだからたかが知れている。学生達が自分で古典を読書すれば、はるかに有益である。また既習の学生に未習の学生を教えさせる、という方法はきわめて効果が高く、教育が学生の中で自己運動、自己発展していく様子が見て取れた。

2008 年前期にはチェーホフの戯曲について講義、16 人の聴講者がおり、ほぼ全員エスペラント経験者であったので、訳のある『ワーニャおじさん』と『桜の園』はエスペラント

語訳を配布した。これは読みたい者は読む、という程度の参考文献にしておいた。『かもめ』と『三人姉妹』のエスペラント化がまだなされていないのが残念である。チェーホフの散文についてはすでにかなりの蓄積がある。これは別の機会に講義に利用したいと考えている。

後期にはロシア文学講義でレールモントフの『現代の英雄』を講義した。これも 13 人程度であった。一セメスター3 ヶ月のうち、2 ヶ月は僕の日本語での講義、あとの一ヶ月はエスペラント語と英語のテキストを配布して『現代の英雄』の一部分を読む、という授業にした。英語しかできないものには英語をもとにして一文一文を読んで和訳していく。エスペラント語で読めるものにはエスペラント語を読ませて訳させる、というやり方である。聴講者たちは、講義でとりあげたロシア余計者に共感を覚えたといい、あとから一文づつ読んで味わうという方法の重要性も認識してくれた。

2009 年前期、「ヨーロッパ文化特殊講義」と題する授業で、私はセルヴァンテスの『ドンキホーテ』をとりあげることにした。9 名の聴講者に『ドンキホーテ』の一節の英訳各種と和訳を配布して、それとエスペラント語を比較しながら読み進める。スペイン語の原文も持っていたのだがある不幸な事情で紛失し、今回配布はできなかった。ほとんど全員がエスペラント語版を読んで訳すことができる。2009 年後期には同じ講義題目でシェークスピアの『ハムレット』をエスペラント語の二つの版、英語（原文と現代語訳）で読む予定にしている。「ヨーロッパ文化特殊講義」という名称の専門課目に十分かなうものと思う。

2009 年、今年の講義ではロシア文学講義として、ゴーゴリ生誕 200 周年を記念してゴーゴリの短編小説を講義した。『ネフスキイ大通り』、『肖像画』、『狂人日記』、『鼻』、『外套』の順に講義していった。12 人の出席者全員に、英語訳、エスペラント語訳、日本語訳を配布し、ただ一人ロシア語ができる者には原文を配布した。講義は学生達に深い影響を及ぼし、芥川竜之介や魯迅に影響を与えたゴーゴリという大作家の異能を学生達一人一人が理解してくれた。ここに天才がいる、と。この驚きから、ロシア文学を専門にやりたい、と申し出る者まで現れてきたが、今の日本に現状ではその環境がない、といってその道は断念するように説得中である。目下、エスペラント語、英語、ロシア語を対照させながら、『外套』を読み進めている。出席者全員に、まずエスペラント語で朗読させ、それを基に和訳できるものには和訳させ、エスペラント語で質疑応答する、英語で和訳するものにはそれを許可し、英語表現の特徴を説明する、ロシア語から訳す者にはゴーゴリのロシア語の特殊性を教える。英語しかできない者に肩身の狭い思いをさせる、という効果がある。英語しか知らない者は英語も未熟である。エスペラント語は発音がローマ字とほぼ同じであるから、既習者・未習者ともに一緒に発音・朗読が可能である。これを基軸にして、他の言語での該当個所を訳させるのはなかなか良い方法である。

ロシア語を勉強した者は一年間文法を習得したあとに、ゴーゴリに着手した。それは冒険ではあるがよくこなし、同級生たちの驚異の的となっている。こういう刺激がきわめて重要なのである。同じ部屋に高度の学生がいる、ということが環境全体を押し上げる。な

お、そのロシア語ができる学生は、埼玉大学経済学部所属であり、彼が一年間聴講してものにしたロシア語は外国語の卒業単位としてみとめられない。今は単位に関係なく彼はロシア語とロシア文学を聴講しているのである。彼はまだエスペラント語は習っていない、ただ世界語速習文法書を渡されただけである。

埼玉大学は英語だけを必修化している。他の第二外国語の常勤教官は一昨年で消滅した。退職していく教官のポストは、歴史学、文学、社会学、国際関係論、なんでもかんでも「外国語」のポストとみなして、外国語教官をゼロにしたのである。私自身ももうロシア語教官ではない、何の教官か僕自身にもわからない。全学の第二外国語は今非常勤講師のみで運営されている。外国語の外注化の完成である。僕と安達忠夫さんの二人はこの方針に危惧を感じ、2005 年からエスペラント語を教えている。エスペラント語は滅びた第二外国語の代替物以上の働きをしている。ロシアの古典が、プーシキン、ゴーゴリ、レールモントフ、ドストエフスキイ、トルストイ、チェーホフ、などの代表作がエスペラント語化され、それを基に文学講義が可能になっている。ソ連、ロシアのエスペランチスト達に感謝したい。

### ３）少人数ゼミ形式の古典講読法

一教室に十数名以下という少数の講義の場合、最初からエスペラント語のテキストとその各種対訳（英、独、仏、露、西、伊、中その他）を配布して講義を進める、という方法が可能である。今年、安達教授はダンテの『神曲』を講義している。受講者は三人である。うちエスペラント既習者は一人であった。しかし、安達先生は最初からイタリア語とエスペラント語対照版を使い、いきなり受講者に読ませるという冒険を試みた。

すると、全員その方法で落伍することなくついてきた。つまり、エスペラント語もイタリア語もできるようになったのである。私が大学院にいたころ、ドイツ哲学（良知力先生）とフランス思想史の授業をとったことがある。その時、いきなりヘーゲルの『精神現象学』、『法哲学』を原文で読まされ、またプルードンをフランス語で読まされた。どちらも一週間で文法を読み、授業に臨んだ。このようなやり方が昔は普通だったのである。大学院での修士論文は、日本国内ですでにその分野の頂点に近いものを要求されていた。今ではそんなことは昔話になってしまった。

安達先生の授業のやりかたは昔の方法を彷彿とさせる。ただし、エスペラント語はドイツ語やフランス語よりはるかに習得が容易である。受講者はあらかじめ配布された僕の速習世界語（録音テープつき）をすぐに読破し、授業に臨み、エスペラント語訳『神曲』を読みこなしている。ついでにそれと対照してイタリア語も理解できるようになった。この事例から、エスペラント語を介在させると、昔ながらの原典講読・精読が可能であることがわかる。エスペラント語は他の言語を習得する跳躍版 springboard といわれているが、古典講読のための跳躍版にもなるし、また古典講読のための解読機械ともなる。古典の世界語訳はエジプトヒエログリフの解読に役立った「ロセッタストーン」である。イタリア

語を知らない学生でもエスペラント語を頼りに解読できるようになるのである。この意味でエスペラント語は諸言語への「導きの糸」である。エスペラント語という杖があれば、どんな高い山でも登ることができる。今年の安達先生の授業はそれを証明してくれている。

前に、ロシア文学の研究にはエスペラント語訳の参照が不可欠である、と書いた。これは世界各国にもあてはまる。今回、せっかくセルヴァンテスの『ドンキホーテ』をあつかったのに、スペイン語原文と対照で読み進めなかったのがかえすがえす残念であった。学生が今すぐにできるようにならなかったとしても、これをきっかけにスペイン語への関心が生じればそれでよいのである。

## ４）受験英語への反省

対訳として、英語文献を配布しておくのは学生に反省を促す上で効果的である。例えば、ゴーゴリの『外套』のエスペラント語訳と英訳とを見比べて、どちらが読みやすいか、学生に体験させてみる。エスペラント語を既習の学生が例えば、授業に臨んで予習をしてこなかったとする。その時、では英語を読んでその個所を訳してごらん、という。予習してない当該学生が英語を読もうとすると、エスペラント語文献以上に訳に躓いてしまう。文学作品での英語の文体、単語の選択は非常に凝っているので、普通の受験英語の実力では歯がたたない。エスペラント語文献以上に辞書をひきまくらなければ解読できない。これを実体験させる上で英訳対照はとてもよい。

英語は一つの単語がきわめて多義である。辞書をひいて、適切な意味にたどりつくまでとても時間がかかる。また、与格、対格が位置関係で示されることが多いので誤訳してしまうことがしばしばある。Call me a taxi! といっても、Oh, you are mr. Ataksi. That means “me” in Japanese! と理解することが可能である。英語の　S+V+O+O,　S+V+O+C はよほど熟達したものでも一筋縄ではいかない。エスペラント語は対格がはっきりしているので、初心者でも正確な訳が可能である。つまり、英語力は他の外国語と比較対照においてその難しさを認識することによって深まるのである。私は、かつてロシア語を学んだ学生達（今では大学教授になっている）から感謝されている。それは、彼らがロシア語によって英語を外国語の一つと考えることができた、ということでの感謝である。英語だけをやった者には英語が絶対化され、その呪縛から解放されにくくなる。他の外国語習得は受験英語への解毒剤として作用する。

しかしながら、ロシア語の文法習得には最低 1 年（90 分授業にして 30 回）はかかる。エスペラント語は 2 ヶ月以内（8 回以下）ですむ。現在の日本の大学では、第二外国語が軽視されている。その状況では、エスペラント語がかつての第二外国語にかわって重要な役割を担うはずである。大学生の語学力低下を防ぐには、全国の大学でエスペラント語を教えるしかない。さもなくば、大学は受験英語だけをたたきこむ高校、予備校の水準より上にいくことはないだろう。はなはだ遺憾なことに語学の面では、日本の大学の高校化が進

んでいる。ただ、旧帝国大学ではいまだに第二外国語は存在しており、戦後の新制大学とはまだ大きく異なっている。新制大学の第二外国語潰しは、もしかすると巧妙なる隠れた大学間格差拡大政策かも知れない。

## むすびにかえて

今年 4 月から東工大でエスペラント語を教えている。受講生は 15 人程度である。6 月半ばから、アンデルセン童話「王様の新しい衣服」を七か国語対照で読んでいる。エスペラント語の部分を発音し、和訳、そしてエスペラント語での質疑応答をする。その後、「自分が学んだ第二外国語で同じ個所を読んでごらん」と指示する。すると、驚いたことにフランス語、ドイツ語、中国語を学びそれで単位をとったという学生達が、たった 6 回程度（90 分授業）学習したエスペラント語よりも読めないのである。これをどう解釈すべきか？　第二外国語を義務として受講した学生達もまたそれがまったく身につかなかった、ということである。教師の教える技術にも問題がある。学ぶ側にも問題がある。エスペラント語教育は日本の語学教育改革のための貴重なモデルである。今年の仙台でのエスペラント語セミナーで、聴講者の一人が「勉強の仕方がわかった」という短い感想を寄せてくれた。エスペラント語の速習は、効果的な外国語学習法を身につけさせ、外国語の確かな習得への近道となる。埼玉大学や東工大の学生もそのことを今実感してくれている。しかし、安達忠夫さんは今年限りで退職、私も残された日々は二年半である。我らが去ったあと、埼玉大学の世界語はどうなるか？　同僚の若手教官にエスペラント語を普及しておこうと思う。